

(2) ムカコムギ－安楽死時代を生き抜いた－

昭和36年(1961)道立農試北見支場(現北見農試)の農林省大麦育種指定試験地が、小麦育種に課題変更になり、育種目標は、パン用硬質春まき小麦、蛋白含量14%にすることで、決着をつけられました。当時「ホクエイ」の往復播きで5割増収という全盛時代でしたから慌てました。間もなく秋まき小麦の育種もやって良いことになるのですが、この時、北海道農業試験場(農林省)の育種目標は、パン配合用及び強力めん用の秋まき小麦でしたから、これは明らかにセミハード(半硬質、準硬質)、北見支場でやる秋まき小麦の育種目標も同じです。唯一大きな違いは、前者が耐雪性、後者が耐寒性です。

低アミロという言葉は、昭和37年(1962)の初めて、雨ぬれで「ホクエイ」につけられました。さらに黒目粒の発生と低蛋白、とくに蛋白の年次、場所による変動が問題にされました。網走管内では、斜里郡が高く、網走郡、常呂郡が低くなります。年次間の差は2%、場所間の差は蛋白の低い年に大きく3%に及びました。

そんな「ホクエイ」に対して、「ムカコムギ」は多条播、多肥栽培で多収、機械化栽培向きでした。このことによって、網走、十勝で「ホクエイ」に代わることができました。パン適性は、「ホクエイ」よりはるかに良く、「農林8号」に匹敵しますが、半硬質赤冬小麦(アメリカDHW)に比べるとかなり見劣りするという成績でした。蛋白含量は、高いところでも12%、多くは11%で「ホクエイ」並、半硬質としても、「農林8号」より低蛋白ですので、とてもパン用とはいえません。

北海道小麦が減り続け、ようやく上向きに転じた昭和50年(1975)に1万6千余haに栽培され、間もなく爆発的に増加した「ホロシリコムギ」の時代へと代わっていきます。

「ホクエイ」と「ホロシリコムギ」という大品種にはさまれた谷間で、日本小麦の安楽死と騒がれた低迷の時代をよく頑張ってくれました。この10年間、全道の平均単収は30%も増収しています。短期間ではありましたが、「ムカコムギ」の時代を築いたといえましょう。また、未解決の低アミロ間

題を除けば、黒目粒の発生が少ないだけでも良質でした。出回り数量は、6～7万tと少ないものでしたから、上手に使いこなされたものと思われます。しかし、「農林61号」と比べますと、めん適性不良、どういうつもりでこんな品種を北海道で作るのですか？と作物学会でたたかれました。同じその筋の人でも、育種目標に関係のないこともある訳で、こちらから言わせてもらいますと、何で「農林61号」に比較せねばならないのかということになります。これはさらに、「ホロシリコムギ」にまで尾を引き継ぎます。育種目標は、時代の状況と要請にふさわしくあらねばなりません。

実は、「ハルヒカリ」の時、大型工場で挽碎試験*をしてもらいました。カナダでは、「マーキス」というパン用硬質品種と同等以上の製粉・製パン適性が実需側から保証されませんと、マニトバノーザンNo.2以上のライセンスが与えられないと言うことに触発されたからです。各方面に大変なお世話になったのですが、「ハルヒカリ」を強力小麦銘柄として、食糧庁の認可を得るために役立ち、また、実需側もよく納得してくれました。

「ムカコムギ」の時は、この試験をやるまでもなく、良質だと思いました。しかし、実需側は、大型試験がないことから、すんなり「ホクエイ」に代わることをためらい、また、不安をいだくのは無理からぬことを知らされました。「ハルヒカリ」であれだけちゃんとやりましたのに、テストミルだけなのか？という訳です。品種育成の最終段階で、無理なく大型挽碎が可能になるような行政的な配慮がほしいと思います。

ばんさい
挽碎試験*：製粉工場における小麦の製粉は、ローラと篩い分けにより、多岐にわたる粉質の粉に分けられます。そのため実際の製粉工場の製粉にかけてみませんと、試験用の製粉機のためのデータと異なる場合があるため、大型の挽碎（製粉）試験が必要とされています。

<長内 俊一>